

52 フランスから来た紙塑人体模型と明治初期日本における人体解剖模型製作の開始

月 澤 美代子

一八二五年、フランスの解剖学徒オズーが紙塑人体全身模型をパリの医学アカデミーに提出した。三年後、製作所を設立して製作を開始するが、師のデュピイトランらの後援を得て販途を広げ次第に世界各地の医学校で使用されるようになった。日本にも幕末から明治初頭にかけて舶載され、江戸の西洋医学所、長崎の医学所、金沢の医学館、福井の済世館、大阪病院等で使用された。このオズーの人体解剖模型は西洋医学導入期の医学専門教育において重要な役割を果たしたばかりでなく、明治初期日本における教育用人体解剖模型製作の開始にあたって制作モデルとしての役割も果たすことになった。

文久三年（一八六三）一月、第一回遣欧使節団の竹内

下野さらにより江戸の西洋医学所に交付された紙塑人体模型は、医学校、そして大学東校へと引き継がれた。明治五年（一八七二）湯島聖堂での文部省主催博覧会では「模造人体仏国製」として展示されており、この年、大学東校からは生人形師松本喜三郎に田口和美指導のもとに人工体を製造するようにとの依頼状が出されている。しかし、この時、喜三郎により制作された人工体は残されておらず、全身人体解剖模型が実際に制作されたかについて不明である、明治十年（一八七七）東京上野で開かれた第一回内国勸業博覧会に二体の人体解剖模型が

出展された記録が残されている。出品目録「第八巻 第二区製品 第十六類教育器具」に東京大学理学部構内工作場で制作された器具模型の一つとして理学部の出品した「人体解剖模形」と、山形県からの出品物として公立病院長・長谷川元良の出品した「紙型人體」である。

いずれも「各部精巧ナルヲ観ル厚ク心ヲ用ヒ力ヲ専ラトスル跡明ラカナリ」という評語とともに一楮製人体解剖雛形」制作者の北川岸次、「紙塑人像」制作者の神保平五郎に対して最高の龍紋賞が与えられている。

しかし、神保平五郎の制作品に対しては「文部省ニアルモノヲ模シ」という語が評語の冒頭に付けられている。明治十年の春、長谷川元良が県令三島公の許可を受け、神保平五郎を東京大学医学部に派遣して紙塑人工体の製造を学ばせたという明治十一年の『医事新聞』の記事が石田純郎氏によって紹介されており、明治十年東京大学の設立にあたって長谷川元良が多額の寄付をしていることを考え合わせると、この神保平五郎の模作は同年、短期間のうちに行われたことと推測される。

日本医史学会十一月例会（二〇〇三年十一月二十二日順天堂大学）で論者は、九州大学医学部所蔵人体模型に付けられた符号を分析し、これが、明治七年から明治十年の短い期間に存在した東京開成学校工作場で大学東校の解剖学者・今田束の指導を受けながら、北川岸次、山越長七により制作開始された楕圓の紙塑人体解剖模型、すなわち、第一回国勸業博覧会に出品された「人体解剖模形」の流れをくむ一体であることを明らかにした。

山越長七によると、この工作場での人体解剖模型制作は明治八年に開始され、明治十二年には経営が大学から

民間に移され、山越がその任に当たったという。北川岸次の死去する明治十五年頃には、今田、北川、山越らは東京大学の龍岡門の長屋の工作場で製作・修理にあたり、金沢大学に現存するキンストレーキは、この時期に今田、山越により修理されている。この後、山越長七は下谷区御徒町に山越工作所を設立し模型・標本・機械等の製作を手広く行っていった。なお、京都の島津製作所が人体模型製作を開始するのは明治二十四年以降である。

北川岸次について蒲原宏先生から有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

（本稿は文部科学省科研費・特定領域A(2)「江戸のモノづくりに」研究の一部である。）

（順天堂大学医学部医史学研究室）